オープンカレッジ

歴史と共に簿記、会計を学ぼう

歴史からのアプローチ

愛知淑徳大学ビジネス学部教授　公認会計士
前田　篤

大学で学生に簿記を教えているのだが、初回の授業で必ず話す内容がある。「簿記（正確には複式簿記）、会計を学ぶことは英語を学ぶことよりもはるかにグローバルな勉強である」資本主義経済の社会では、必ず複式簿記の手法を使って決算書を作成し、それを利用ており、これを使っている人々は英語を話す人々よりもはるかに多いからである（もっとも英語は国際的な公用語となっているが）。そして、「世界中の人々が簿記を使っているということは、それが簡単だからである」と続き、「だから、皆さんもぜひ、簿記を勉強し、これをマスターしてください」と話すのである。多くの学生は、キョトンとしているのだが、長い歴史の中で同じ複式簿記の手法を使って決算書を作成し、世界中がこれを利用しているのは真実である。

とはいっても、簿記、会計を学ぶことは初学者にとっては、結構大変である。なじみのない専門的かつ難解な用語が多く、とっつきにくく、途中で断念してしまう人が多いのも事実であろう。そこでお勧めなのがその歴史と共に簿記、会計、さらには経済を学んでみることである。そこには、さまざまな登場人物が現れ、人々の生活があり、ドラマ、エピソードが満載である。必ずやはっきりしたイメージを持って、より身近なものとして簿記、会計を学ぶことができるのである。

世界で初めて簿記を体系的に示した書物は、ルカ・パチョーリの「スンマ」である。時代は15世紀のイタリアでルネサンスの時代に当たる。この直前、ヨーロッパでは感染症ペストの大流行があり、多くの人々が亡くなっている。しかしながら、この後「紙」が誕生し、「活版印刷技術」が生まれ、アジアから「インド・アラビア数字」が伝わり、これらが簿記、会計の発展を大きく後押しした。ルカ・パチョーリは数学者でその弟子には、「最後の晩餐」「モナ・リザ」などを描いた画家であり、天才科学者でもあるレオナルド・ダ・ヴィンチがいた。「最後の晩餐」では、遠近法が使われている。さらに「銀行（バンコ）」が生まれ、発展したのもこの時代で「為替手形」「与信管理」「本支店会計」なども現在の原型となるものが始まっている。有名な銀行家ではメヂイチ家がある。ただ、この時代の会計は〝自分のための会計〟であり、組織（ガバナンス）、第三者のチェック（監査・モニタリング）などが十分に機能していなかった。これらの問題は、17世紀のオランダ以降へと受け継がれていくのである。

会計は、その後、オランダ、イギリス、アメリカ、そして今日のグローバル経済へと引き継がれ、「原価計算」「管理会計」「連結会計」「ファイナンス」と21世紀の今なお、さらなる発展・進化を続けている。皆さんもぜひ、とっつきにくい簿記、会計を歴史と共に学んでみて下さい。必ずや興味が持てるものと確信します。

※本稿は「会計の世界史」（田中靖浩著　日本経済新聞出版社）を参考にしています。

まえだ・あつし　監査論、会計実務。慶応義塾大学経済学部卒業。監査法人伊東会計事務所（現ＰｗＣあらた有限責任監査法人）などを経て現職。１９５９年生まれ。